

Kiko

ボン

気候ネットワーク

〒604-8124 京都市中京区高倉通四条上ル高倉ビル3F

Tel:075-254-1011 / Fax:075-254-1012

E-mail:kikonet@jca.apc.org http://www.jca.apc.org/kikonet/

〒102-0083 東京都千代田区麹町2-7-3 西川ビル2F

Tel:03-3263-9210 / Fax:03-3263-9463

E-mail:kikotko@jca.apc.org

気候ネットワークは、地球温暖化対策に取り組む市民のためのネットワークです。

「Kiko」は、温暖化問題の国際交渉の状況を伝えるための会期内、会場からの通信です。

運用ルール、包括合意成立！！ 京都議定書救出へ

【全体会で沸き起こる拍手】

2001年7月23日1時頃、京都議定書の運用ルールの大枠について包括合意した。京都会議から3年7ヶ月を経て、ようやく京都議定書の中身が決まり、出来あがった。人で埋め尽された会議場は全員総立ちになり、大きな拍手に包まれた。ここで合意する決意で会議にやってきた参加者は皆、胸を熱くしたことだろう。日本の抵抗によって、協議は2日間夜を徹して続いた。もはや合意は難しい、また決裂か、という場面が何度もあったにもかかわらず、核となる「途上国問題」「京都メカニズム」「吸収源」「遵守」問題のいずれも落とすことなく、政治的合意が得られたことには、NGOも奇跡的と受け止め、評価を示している。

【日本がゴネなければもっと早く合意】

日本政府は事前に、部分合意が精一杯だと悲観的な見通しで会議に臨んだ。その予測を大きく超えて包括合意に至ることができたのは、世界の大半の国の合意作りへの強い決意による。

最終合意案についてのブロンク議長との協議でも、日本は批准のカードを振りかざした。EU、CGII、途上国、アンブレラグループのうちニュージーランド、アイスランド、ノルウェーらが合意案を受け入れることを表明した。日本は、遵守問題や原子力問題などで、最後まで合意を拒み続けた。決裂の危険を犯してまで日本が合意を拒み続けることがなければ、深夜に渡って交渉を2時間も延長

させることはなかった。

23日未明、ブロンク議長が日本を含めた包括合意のために遵守で修正の可能性を示したことで、まとまりかけていた各地域グループ間の協議が混乱した。大きな危機に、世界のNGOは「日本が京都議定書を殺した」というプレスリリースを一齐に作りかけていた。

【日本への拍手の意味は？】

合意作りへの各国の強い決意に、先延ばし要求を引っ込めなければならなかった日本は、交渉合意を妨げることはあっても、決して協力的ではなかった。全体会で川口大臣の発言に大きな拍手が贈られたが、これが、長い長い抵抗の後、「最後に合意をしてくれてありがとう」という皮肉の拍手に聞こえた人は少ないだろう。ブロンク議長は、川口大臣が、「私は決してポジションを変えません。」と言い続けたことを紹介した。

【日本が抜け穴拡大】

今回、包括合意へ向けて積極的に譲歩を示したのはEUであった。多くの抜け穴に反対するEUには行きすぎた妥協だった。アメリカの参加を理由に合意も批准も渋っている日本に譲歩を示すことによって、合意への雰囲気を作り出した。結果的に、日本の交渉姿勢が、吸収源利用など議定書の抜け穴を拡大させ、国内排出削減を緩めさせたとともに、日本の「ゴネ得」が透けてみえる議定書となった。この傷を負わせた日本の責任は大きい。

【日本は批准を!!!】

大臣級会合の間に、日本が最後まで批准の意思を示さなかったことは、世界に大きな失望を与えた。今回の包括合意は、実質的には米国抜き批准のプロセスのスタートである。日本は、直ちに批准を表明し、6%削減という目標へ向かって国内対策を強化しなければならない。

【KYOTO IN BONN】

ブロンク議長席に“KYOTO IN BONN”という横断幕がかかっており、会議場で拍手が起こるたびにそれが映し出された。これは、ここBONNで包括合意して京都議定書を生かしていくのだというブロンク議長と条約事務局の強い意思とEUのリーダーシップを示すものだ。これは同時に、議定書を生かす気があるのか分からない日本には期待しないことを示している。日本の役割を世界に示し、信頼を取り戻すには、この会議で批准を明らかにし、議定書を救うこと以外に道はない。

祝・原子力利用へ制限

京都メカニズム（共同実施・クリーン開発メカニズム）で原子力利用を控えることが決まった。京都議定書は、国際的に、温暖化対策の名のもとで原子力利用を認めないことをルール化したのである。日本国内でも、温暖化対策としても進められる原子力利用は、これを機に、国際制度との一貫性を持たせるよう抜本的見直しをする時だ。

COP6 合意の主な内容

途上国問題

気候変動特別基金（条約）と適応基金（議定書）を新設。金額は、政治的宣言の中に折りこむこととされ示されず。

京都メカニズム

・補完性は、「国内対策は目標達成の重要な要素を構成」と定性的な表現に止まる。
・排出量取引の売りすぎ防止措置として、予め排出枠の90%又は直近の排出量のうちのどちらか低い方を留保する必要。
・共同実施・CDMにおける原子力はさし控える。

吸収源

森林管理の吸収分は、国ごとに上限を設けることで日本などに特別に譲歩。CDMのもとでの吸収源利用は1%が上限。

遵守

・削減目標を達成できなかった場合、超過した排出量は、3割増しで次期排出枠から差し引く。
・遵守委員会の構成は先進国対途上国の構成が4対6
・不遵守帰結の規定化はCOPmPに

大臣会合最終日ドキュメンタリ

日本政府、最後の最後まで抵抗

【21日（土）午前】ブロンク議長を中心に、資金と技術移転、京都メカニズム、吸収源、遵守の4つの交渉グループと5つの地域グループの間で調整が続いた。

【21日（土）14:30】合意案を議論する中心となる拡大グループ会議が開催され、4つの交渉グループの進捗が報告された。途上国問題で進展した一方、京都メカニズムは合意が進んでいない模様。ブロンク議長が、今日中に合意案を作ると発表し、準備に入る。

【21日（土）22:00】ブロンク議長、

拡大グループ会議を召集し、合意案を配布。翌日から各グループと交渉する予定を告げたが、「今晚から交渉をすべき」と川口大臣らが要請したため、夜を徹して22日0:40から各グループと交渉することとなった。

【22日（月）朝】日本政府は調整案に満足していないとの報道。グリーンピースやWWFは、問題点を指摘しつつも、会合の残り時間に照らして決裂を避けることを優先し、議論の蒸し返しよりも収束的対応を各国政府に求めた。しかし、日本政府は吸収源でゴネ得としかいいようのない過大な量を与えられたにもかかわらず、原発やODAの扱い、遵守制度などに強く抵抗する姿勢だった。日本の要求を獲得すべく最後の一国になっても頑張る、という暴論者も政府内にあったらしい。急遽、気候ネットワークなど4団体連名で、「これ以上交渉をブロックしてはならない！」とのアピールを出す。

【22日（日）17:00】拡大グループ会議開催。ブロンク議長が、大半の国が合意案受け入れを表明したが、途上国グループと残りのアンブレラグループが合意する前にまだ議論を必要としていると発表。協議がまた続けられた。

【22日（日）22:00頃】途上国グループが、合意案を受け入れることを決定。

【23日（月）0:30】拡大グループ会議開催。ブロンク議長からこれまでの協議結果が報告される。批准に重要な国（日本）が遵守問題に反対していると報告。遵守問題だけについてさらに協議をすることになる。日本が反対する理由は、外務省や経産省の抵抗や帰国途中の小泉首相の返事を待っているとの噂も流れる。

【23日（月）2:00】NGOが日本政府に緊急会合を要求。遵守規定に反対する理由の説明を受けるが、「先例がないため」などの説明にNGOは啞然。これ以上反対

気候と参加国を守る箱舟

25ヶ国以上の国から集まった数千人の地球の友のスタッフは、京都議定書を救うための巨大な箱舟をつくる。この舟は全長30m、幅6m、高さ4mである。世界中から寄せられたメッセージを書き込んだ2000以上の木片を集めてこの舟はつくられる。地球市民社会が真の行動を求めていることを政治家に思い出させるために、救命ボートは会場前で今後も展示される。(eco 7/20号)

21日、実際に、環境NGO「地球の友」、「BUND」主催によるイベント「LIFE BOAT、ノアの箱舟」が開催された。巨大な舟を組み立て、世界中から集まった6千人の市民が4時間かけて舟を会場まで曳航し、温暖化の脅威とボンでの合意を訴えた。セレモニーでは、日本から集められた5000以上のひと声メッセージを気候ネットワークから紹介。(平岡俊一・(COP6滞日記は、<http://www.jca.apc.org/kiconet/>にて))



を続けると合意を壊すと強く申し入れる。

【23日（月）2:00~6:00】日本政府は遵守の先送りや弱体化させる修正を続ける。EU、途上国との間の調整難航。

【23日（月）7:00】合意へ近づいてきたとの情報が漏れ出す。

【23日（月）10:45】EUが記者会見、合意へ辿りついたと報告。拍手が起こる。23日（月）12:00 全体会合開催、ブロンク議長拍手で迎えらる。

【感謝状】 ブッシュ・アメリカ大統領殿

貴殿は、京都議定書からの離脱とその死を一方的に宣言されることによって、日本の国会議員に京都議定書を守らせる任務を呼び起こされました。また、ボン会議場では京都議定書への貴国の参加が当面想定しえないことを明らかにし、ジェノバからもその死への期待をほのめかされることによって、ボン会議に参加する交渉団（日本などアンブレラグループの一部を除く）に京都議定書を救出する任務を深く認識させ、一致団結してここで合意を作り上げることに励ましを与えました。その結果、京都議定書は救出されました。よってここに、京都会議議長国日本の市民を代表して感謝状を贈呈いたします。

Kiko 再開COP6通信 No.5

2001年7月24日発行

発行・編集/気候ネットワーク

浅岡美恵、田浦健朗、平岡俊一、平田仁子、翻訳：小倉正、吉村敦子